

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:56.

弁膜症患者の術後早期における運動療法への意欲、取り組みに関する要因

落合 真菜、小西 可菜実、齊藤 日香里

弁膜症患者の術後早期における運動療法への意欲、取り組みに関する要因

旭川医科大学病院 9 階東ナースステーション ○落合 真菜、小西可菜実、齊藤日香里

目的

弁膜症手術後から退院までの運動療法時における患者の意欲、取り組みに関連した要因を明確にする。

方法

対象は ADL 自立、左室駆出率 60～70%、精神疾患がない退院約 1 週間前の患者 4 名。半構成的面接法を用いて面接を行った。

倫理的配慮

本研究は院内の倫理委員会にて承認を受けた。

結果

A 氏より【退院後の生活を考えている】【運動療法の目的を理解している】【家族の励ましを得ている】【医療者からのサポートがある】【運動療法を行うことに対して不安がある】【運動療法時に身体症状がある】、B 氏より【退院したいという想いがある】【運動療法の説明を覚えていない】【運動療法を行うことで達成感が得られている】【運動療法時に身体症状がある】【運動療法を行うことに対して不安がある】【運動療法を続ける自信がない】、C 氏より

【退院後の生活を考えている】【運動療法に関して不明なことがない】【医療者からのサポートがある】【身体症状が軽減している】【運動療法を行うことで達成感が得られている】、D 氏より【退院したいという想いがある】【家族の励ましを得ている】【身体的症状がない】【運動療法を行うことで達成感が得られている】【説明内容を理解できなかった】というカテゴリーが抽出された。

考察

運動療法の実施により達成感が得られたことは、目標距離を歩行し運動療法を実施できるという認識、自己効力感に繋がった。家族の励まし、医療者のサポートは、他者からの肯定的評価が運動療法に対する不安を軽減させ、自信の強化に繋がった可能性がある。退院後の生活を考えることは、入院前と同じ生活を送りたいという想いが運動療法の必要性への認識となり、実施する動機づけとなったと考えられる。また、身体症状がある中でも必要性を理解することで、辛くても運動を実施しないと改善しないという認識となり、運動療法への意欲、取り組みに繋がったと考える。